# ＴＡＮＪＵＮＧ　ＢＡＬＩＴ村　調査報告書

（タンジュン）（バリット）

２００４年１１月２０日

報告者　　坂　井　美　穂

東京地方裁判所　御中

## 第１　調査の概要

２００４年９月１９日から２０日にかけて、Tanjung　Balit（タンジュン・バリット）村に赴き、まず住民から移転経緯などに関する話を聞いたうえで、住民同行による現地視察を行い、全体を把握した。なお、調査の便宜上、住民の聞き取りは、Tanjung Balit 村に隣接する、Tanjung Pauh（タンジュン・パウ）村の国道沿いにあるワルン（喫茶店）で行った。

## 第２　調査結果

以下、聞き取りと現地調査に分けて調査結果を示す。

### １　住民らからの聞き取り結果

２００４年９月１９日、Tanjung　Pauh 村の国道沿いのワルンにて、ARMAN（原告番号Ａ３、アルマン）、SUKI　MUNCAK（原告番号Ａ１４、スキ・ムンチャック）の２人から聞き取りを行った。結果は以下の通りである。

#### （１）移転の経緯について

政府側から移転の話を最初に聞いたのは９０年代にはいってからのことで、特に県知事や郡長が直接村にやってきて住民に直接説明した、ということではなく、コトパンジャン・ダム建設に伴う移転の話は、Tanjung Balit 村の村長 Bakaruddin（バカルディン）から耳にした。その当時は村長から、「今はゴザの上で寝ているかもしれない、しかし移転すれば、みんなベッドの上で寝れるようになる」、「今はランプを使っているかもしれない、しかし移転すれば、みんな電気が使えてさらに電気代は無料だ」という説明がされた。当時村長自身も自身の家を燃やしてしまうといった行為で、住民に自身の移転の意思を示したという。

彼らの移転は、ＡＢＲＩ（当時のインドネシア陸軍）、警察立会いの下、１９９３年７月に始まった。

#### （２）移転後の状況について

移転先の状況を見て、住民は大変失望した。と同時に、政府に騙されたとも思った。政府から用意された家は人間が居住するような場所ではなく、また約束されていたゴム園でさえも、Tanjung Balit 村の農地にはゴムの木１本も植えられていなかったどころか、まだ農地が割り振られていない住民すらたくさんいた。最近２００３年頃から、ようやくゴムの木が植えられ始めたが、未だもって自分の農地の場所を知らない住民はいる。準備された井戸は水が枯れていた。井戸を掘ろうにも、移転させられた土地が高地なため、水脈まで達するのが非常に困難である。

仕方なく住民たちは、雨季には雨水を溜め、乾季には昔の Tanjung Balit 村に戻って水を集め、ようやく水を得ることが出来る。それでも、乾季の際は水を探しにいくということで余計な出費（交通費）がかかる。

トイレは機能せずに自分で作り直すか、川やその辺りで済ましてしまったり、また無料だといわれた電気は設置すら有料（現在では設置だけで 100 万ルピア 13,000 円かかる）なので、新しい村でも電気を使用できない住民がこの村では５０％ほどいる。唯一まともだと思われた１年分の生活保障（米、魚、砂糖、塩、食用油、灯油、石鹸）は、品質に問題があり、特に魚などは人間の食べれるものではなかったため、植物の肥料にしていた。

このような新しい村での苦しい生活に耐えられなくなった住民たちは、水位が上がると危険なのを承知で、昔の村に戻っている。その住民の数は、大体村の３割、１５０世帯ほどに相当する。もちろん昔の村でも電気は通っていないが、それでも新しい村に比べれば、ゴムの木を切ったり、湖でバリド、タパ、モタンといった魚を探したり（１日多く取れて２キロ、１キロにつき 10,000 ルピアで売れる）、木材を探したり、と生計手段もあるし、なにより水がある。住民は新しい村での家を壊し、その木材を売却したり、燃料にしている。

また、２００３年になり、インドネシア政府からのアクション・プラン（村道路の設置、上水道整備、農園整備、牛１頭支給等）が始まった。しかし、たとえ牛が支給されたとしても、住民は飼育できるだけの余裕がない。人間の食べ物でさえ手に入れるのが困難であるのに家畜を飼育することは不可能なのである。整備された上水道も、パイプもあり、蛇口もあるというように設備面は全て揃っているのに肝心の水が無い。新しい村では昔の村にあった生活、社会、文化さえもが無くなってしまった。

## ２　現地視察結果

２００４年９月２０日、前述の ARMAN 及び SUKI MUNCAK の付き添いのもと、現地視察を行った。結果は以下の通りである。

### （１）家屋、井戸、ＭＣＫ

まず住民の現在の生活状況を把握するため、新しい村の井戸を視察した。住民

が移転した際からすでに井戸（写真１）は政府によって準備されていたが、その中をのぞいて見ると、水はまったくなく、枯れていた。（写真２）これは今ではまったく使用されていない井戸で、井戸の中まで雑草が茂っている。

（写真１）

（写真２）

（写真３）

（写真４）

その井戸の近くに、政府が用意したと思われるトイレの跡（写真３）があった。ＡＲＭＡＮ氏によると、一応コンクリートで足場が作られていて、木の板で囲いがしてあったという。地面を掘っただけの簡易なつくりであったため、汚物がすぐにたまってしまい、後に住民は使わなくなってしまったという。放っておいただけでこのように外郭が風化してしまう程、簡易なつくりであったということである。

これらの井戸、トイレの近くに見受けられた家屋（写真４）には、人が住んでいる気配が無かった。この家屋ばかりか、この辺りは空き家が多く、住民の話によると、この辺りの住民はより豊かな生活を求めて、昔の村に戻っているという。

（写真５）　　（写真６）

そこから２、３分、アスファルト舗装が全くされていない村道（写真５）を歩いたところに、２００３年から始まった政府のアクション・プランで作られた上水道設備（写真６）が見受けられた。

（写真７）　　（写真８）

付き添いの ARMAN 氏が蛇口をひねってみたが、全く水は流れなかった（写真７）。 他の蛇口でも同様に水が出なかったため、水がかれており水道として機能していないことがうかがわれた。

水道メーターのふたを開けてのぞいてみると、設備されてからこれまでに、たった６㎥しか使用されていないことが分かる（写真８）。水道料金がかかるということであったため、あまり使われていないことがうかがわれた。

**（２）ゴム園**

住宅地からバイクで１５分程、とても道路とはいえないような、赤土が丸出しの悪路（写真９）を３㎞程走ると、政府から支給された Tanjung　Balit 村住民の

２ヘクタールのゴム園が広がっている場所にたどり着く（写真１０）。

（写真９）

（写真１０）

（写真１１）

（写真１２）

ARMAN 氏に、自分の所有するゴム園を案内してもらった（写真１１、および写真１２）。見ての通り、最近焼畑を行ったばかりである。まだゴムの木は見当たらない。ましてや以前のインドネシア政府の約束のように、移転したらまもなくゴムの木は収穫可能になっている、という状態とは程遠い。中には全て自費でまかなってゴムの木を植えた住民もいるが、 食べていくのにも苦しい生活を強いられているたくさんの住民にとって自費でゴムの木を植えることは困難である。

**（３）昔の Tanjung Balit 村へ**

今まで述べてきたことから明らかなのは、移転先で経済的、文化的、全ての側面から苦しい生活をしている住民がいる、ということである。そのような住民たちは、危険を承知で、自らすすんで昔の Tanjung　Balit 村へ戻っている（写真１３）。そこで、この昔の村も訪れてみた。

（写真１３）

（写真１４）

そこには住民の生活感が溢れていた（写真１４）。水が迫ってくるリスクを背負いながらも、水力発電所から供給される電気が全く通っていないにも関わらず、それでも、住民たちは戻ってきているとのことである。いかに、昔の村が住民にとってすばらしかったか、また新しい村ではそれらが見受けられなかったか、ということが分かる。

（写真１５）

（写真１６）

これは今は使われていない旧国道沿いの昔の村であるが、以前この場に建てられていた住宅の跡がまだ残っている（写真１５、および写真１６）。いかに住民は昔の村で豊かに暮らしていたか、ということが、見て取れる。これらの住宅は、すべて恒久的な住宅であり、たとえ浸水の被害を受けても家のつくりがまだ残ったままになっているのである。

以上